

西中通中学校区



春日の藤塚（春日の神の垂跡）

春日神社の東南の田の中に藤塚というところがあって、村人の崇敬されている。

昔、春日という地名もなかったころのことであろうか。夜な夜な村端の森に怪げに光るものがあった。日が暮れてからは外に出る者もなく、加持祈禱をしたり、起誓を書して神社や寺に納めたが怪しい光は鎮まらなかった。

時に他所から帰った九兵衛という若者が自ら見届けることになった。怪しい光に近づくと「九兵衛、九兵衛」と呼ぶ者がある。日ごろの勇気を示すのは今とばかり、声をたよりに進んで行くと、光は消えて、どこからともなく白髪童顔白衣の翁が現われ、左手に幣を持ち、右手で「九兵衛、九兵衛」とさし招いている。ありがたい気持ちでいっぱいになって、九兵衛はそこにぬかずいた。するとその翁は「われは春日の神なり、われ永くこの地に垂れて汝等を守護せん。汝歸りてこれを村人に告げよ」というと姿が見えなくなった。その夜村人たちはひとしく霊夢を感じた。それから産土の神として崇敬することになった。

今の春日神社がこれで、九兵衛の姓は杵淵といって子孫は今に続いて、明治維新当時は春日の宮守であったという。



春日の神様の忘れた観音様

昔、ある夜春日の九兵衛の枕もとに春日の神様が現われ「お前のお蔭で私は春日のお社にお祀られることになった。ついてはお前は宮守りになって神社におつかえすることがよからう」と言って白装束からするりと抜けられて出て行かれた。九兵衛はその白装束をお届けしようと取りあげると白装束にくるまって尊い観音像が現われた。これは大変と、

「もうし春日の神様、忘れ物でござりまするよ」

と大声をあげて戸口に出て見たら松林を西にまがられたので、なお後を追ったがどこへ行かれたのか見失ってしまった。

九兵衛は仕方なく春日の陣屋に届けたところ、「神社に観音様をお祀りするのはよろしくない。お前の家で観音様をお祀りするがよからう。」

とその観音様を九兵衛におさげ渡しになって以来、杵淵九兵衛の家室として祀られることになったという。

藤のない春日

春日の村では、藤の木が一本もないという。又村民はごまを作らないという。

その故は、かつて春日社の神様が、村をおまわりになった時、藤づ

るにつまづいて転び、運わるくゴマのさやで目をつぶされたという。これ以降、春日では藤を全部きりたおしてしまったという。

橋場のいわれ

赤田城主齋藤家が没落したので主従は四散した。その中に品田嘉兵衛という武士がめぐりめぐって橋場の土地に住むことになった。

当時橋場は長岡街道の道にあたり、ここから渡し舟で鯖石川を渡り長岡に行ったが荒浜、椎谷、出雲崎に行く（奥州街道）人たちも風の荒い日は悪田の渡し舟が欠航するためこの橋場の渡し舟を利用した。

この渡し舟の不便のありさまを見て嘉兵衛は橋をかけんと思いつき、仲間呼び掛けて橋をかけ天保橋といつた。

天保橋が出来てからこの土地を橋場と呼ぶようになった。

橋場の蟹が淵

橋場より荒浜に至る鯖石川の川すじに蟹が淵という淵がある。昔橋場の釣道楽とあだなをとった男がある日、この淵で魚を釣ったが一匹の魚も釣れなかった。こんな事は今までなかった事である。夕方になったので釣道楽は帰ろうと思つて釣竿をあげると見事な大蟹が一匹かかっていた。

今夜の酒のさかなが出来たと大喜びで捕えると大蟹は、

「私はこの淵の主である。どうか命を助けて下さい。そのかわり以後釣においての節は鯉でも鮒でもつらせませす」と涙を流して頼んだので釣道楽の男は哀れに思い「じゃ助けてやる」と釣った蟹を淵に放してやった。この話をきいてそれからこの淵を蟹が淵と呼ぶようになったという。

橋場のがにが淵のいわれ

鯖石川が橋場地内で砂山にぶつかって急に方向をかえ西流して日本海に注ぐのだが、その砂山にぶつかるところは深い淵となつていゝ。里人はこれをがにが淵と呼んでいる。

基盤は粘板岩だが上層は砂であるため出水のたびに岸が削り取られていく。

昔長岡藩士所用があつて来柏し帰途このがにが淵の道を通ると今朝通つた時と全くちがつて、がにが淵のすぐ真上に道が通じているので、狐に化かされたかと思つて「さあ狐よ出てこい」と一夜そこで徹夜してあかした。夜明けてみて、それは河の水が土地を削つたとわかつたということである。

なぜがにが淵と名づけたかと言えば、江戸浅草でやしやが蟹を売り、「この蟹は柏崎の橋場と申す所に深い深い淵があつて、その淵の中からもくもくわいて出てくるかにだ」

とはやしたつて売つたので、がにが淵の名が宣伝されたという。またあるやしはそれに着想して「がにが淵怪談」という芝居を脚色して大もうけしたといわれている。

拘留尊仏（くるそんぶつ）

最澄（さいちょう）は、中国天台山国清寺での修行を終え、帰国の日が近づいたある夜、夢に仏の姿を見た。仏は最澄に

「わしは、国清寺の拘留尊仏である。わしを日本に持ち帰って、
仏法をひろめよ」

と言われたので、師の道遂に乞うて、拘留尊仏を日本に持ち帰った。日本に帰った最澄は、拘留尊仏を良い、諸国をめぐって天台宗をひろめた。土合に来られた時はちょうど夏で、沼という沼には紅白の蓮の花が、いい匂いを放って咲き競い、極楽浄土もかくやと思われた。その夜、最澄は又夢に拘留尊仏を見た。仏が言うには

「この地は大変わしの氣に入った。村人たちは泥の中から抜きで
て咲く蓮の花のようにけがれないものと見抜いた。ついてはこ
こをわしの永久の住家としたいから、ここに堂をたてて、わし
をまつるがよい」

夢から覚めた最澄は、村人にその事を話し、景勝の地岩野山に、一字を建立する事とし、中国天台山から持ち帰られた土とねり合わせ、本堂の基礎を固められた。それ以後この土地を土合と呼ぶようになったという。

こうして建てられた岩野山無量寿寺に、梅樅木で彫刻された拘留尊
仏を（背面に周穆王五十二と彫刻されている）安置された。

時の城主も深く信仰され、広大な御供養地を賜わり、信者も全国的に広がり、一時土合は七堂伽藍が、蓮池の間に建立されたという。

土合村村民は当時全村あげて、蓮池という姓を名乗っていたとい
う。

焼けた不動明王

土合の不動院の寺宝に、不動明王の掛軸があった。火焰を背にし
て、降魔の剣をふりかざす極彩色の不動明王の顔立ちは、見る者を
ふるいあがらせる恐しさであったという。

村に病人があると、この寺宝をお招きして、病室にかけると、不動
明王のものすごい形相に病魔は退散するものか、病人は旬日を出で
ずして、心さわやかになり、病氣は全快するのであった。

ある日、寺宝をお招きした某家で、夜中一陣の風がしのびこみ、ろ
うそくの火がこの掛軸にもえ移り、瞬時にして、右手首の小紙片を
残して、外もえ尽きてしまった。

その家の主人も住職も、恐懼して、陳謝したが後の祭りで、どうし
たものかと、ただらろろするばかりであった。

ある夜、住職の夢まくらに不動明王が現われる事三晩、そして言わ
れるには、

「残ったわしの手首だけでも、表装して敬い信じよ。真に信じて
疑わぬなら、前と同じく、病魔を追い払ってやろう」

と。住職は直ちに前と同じ寸法の黒い紙を表装し、その右手とおぼ
しきあたりには、焼け残った右手の紙片を表装して寺宝となした。

夢のお告げ通り、その掛軸は以前の寺宝と同様、靈験あらたかだっ
たので、村人は奇異を感じ、尊崇前に増したという。

えぼ清水

岩野山無量寿寺が焼失して、本尊拘留尊仏は土合の降魔山清蓮寺不動院に安置される事になった。時の不動院主は

「かかる尊い拘留尊仏は、広く世人に開帳して、仏法弘通すべきだ」

と考え、有縁の地をたずねては、出開帳し、仏法を弘めた。

越後の国會根村で出開帳された時である。眼病をわずらい、医者に見放され、失明寸前の會根の一老婆が出開帳の事を聞き、拘留尊仏の何たるかは知らなかったが、目を直してもらいたい一念に、出開帳の七日間を一心に欠かさずおまいりして、お願いした所、七日目の夜、拘留尊仏が、老婆の夢まくらに立たれて、

「熱心な信心のほうびに、お前の願いをかなえてやろう。土合の不動院の境内に、岩の間から湧きでている清水がある。村人たちはえぼ清水とよんでいるが、これは伝教大師の加持の水であったのだ。その水で目をたでれば、きっとよくなるであろう。」と、言われた。

これこそ拘留尊仏の靈驗と、老婆はこの事を不動院住職に話し、えぼ清水を送って呉れるように頼んだ。

住職は快諾して、えぼ清水を老婆のもとに送った。それから一月たつて老婆は、不動院をたずねて、眼病が全治した事を、院主に語り拘留尊仏にお礼申しあげたという事である。

不動院の竜灯木

土合の不動院という寺の境内に竜灯木という大きな木がある。

昔、村の人たちが朝早く起きて、別山川から田んぼに引く水をとっぽうであげていた。

すると明けの明星のように、光るものが東の空から西の空へ流れて行った。これは竜神様が灯を献じたものにちがいないと信じた。それから竜灯木と名がつけられたという。

木は「よろんごの木」とか「よみの木」とかいわれるもので、虫歯の治療にきくといわれている。

土合のいわれ

かつて最澄が、この地岩野山に無量寿寺を建立するとき、その基盤となす土台に、中国天台山から持ち帰られた土を埋めた。よって日本の土と中国の土と合わせたので、土合の無量寿寺といったいう。

又一説には、かつて弘法大師が、ここを通られた時、一農家に宿を乞うた。この家の老爺信仰心厚く、心から大師をもてなしたので、大師は之に感激し、笈中にあつた中国の土とこの地の土をねり合わせて、老爺に贈ったという。この地蔵は靈驗あらたかたので、土合の地藏尊と世に喧伝される事となった。

それ以後この地を土合という。

めめっこじいさん

今から一五〇年前、春日陣屋の代官の暴政によって領民は苦しむ「春日領へは嫁や婿にやるな」と言われる程であった。

領民は、大挙して陣屋を襲った、これを春日騒動という。暴動がおさまってその首領十八人江戸に送られて裁判さるゝ事になり、その中にめめっこじいさん（小林半え門）がいた。この人はやけどをしたため、容貌が恐しく、

「馬が通るんだ、馬が驚きさわぐから、一寸あっちを見ていてくれ」と、言われた程であったという。

しかし美声で、その上胆力もすわっていて、捕吏が来た時、顔色をかえず縛についたという。

さて一行　とうまるかごに乗せられ、目を重ねて、三国峠にさしかかったが、これで越後も見納めか同一悄然とし、中には涙をおとす者さえあった。

これを見て、めめっこじいさんは、一同を励まそうと籠の中から朗々と「鶴の巣ごもり」を歌い出した。附添の役人が

「不調法なり　神妙にせよ」

と叱りつけたが、宰領の役人が

「すておけ　すておけ」

と言った。めめっこじいさんは、宰領が

「大変よい声だ　今一つ歌え」

と言ったので、更に「二丁つき」という歌を歌って、一行を励ましたという。誠に胆玉大きい事と驚かぬ者はなかったという。小林半え門は、当時長崎新田の総代だったと。

西中通地名考

春日・鎮守春日社より村名起る

旗原・昔は牧原と書いた。牧馬場であったのではなからうか。馬糧

供出地

昔春日の馬市あり

橋場・長岡街道で、昔はここより鯖石川を渡し舟で渡った。天保年間部落民醸金して橋を架けてから、橋場とよぶ。

長崎新田の地藏尊縁起

長崎新田に　頭痛・腰痛に靈驗あらたかな地藏尊があつて、四方より祈願旗を奉納するもの多く、毎夜灯明のつきた事はないという。昔この村に悪魔が住みついて、村人の妨害をなすこと甚しかったので、不動院の庵主にどうしたらよいか相談した。

庵主も気の毒に思ったが、人力ではどうする事も出来ないから、仏

力にたのむより外ないと言った。

村人は、金を出しあって、悪田の石屋に頼んで、地藏尊を作った。
村人は、不動院の庵主を頼んで之をお祀りした。この仏罰におそれ、悪魔はどことなく逃げてしまったという。

